

当芸志美々の反乱

——伊須氣余理比売の歌二首——

〔1〕古事記の神武天皇条には当芸志美々の反乱説話が載せられている。

於_レ是其伊須氣余理比売命之家、在_二狭井河之上_一。天皇幸_二行其伊須氣余理比売之許_一、一宿御寢坐也。〔其河謂_二佐葦河_一由者、於_二其河辺_一山由理草多在。故、取_二其山由理草之名_一、号_二佐葦河_一也。山由理草之本名云_二佐葦_一也。〕後其伊須氣余理比売、参_二入宮内_一之時、天皇御歌曰、……（歌謠略）……然而阿礼坐之御子名、日子八井命、次神八井耳命、次神沼河耳命、三柱。

故、天皇崩後、其庶兄当芸志美々命、娶_二其適后伊須氣余理比売_一之時、将_レ殺_二其三弟_一而謀之間、其御祖伊須氣余理比売患苦而、以_レ歌令_二知其御子等_一。歌曰、

佐葦賀波用 久毛多知和多理 宇泥備夜麻 許能波佐夜
芸奴 加是布加牟登須

〔狭井河よ 雲立ちわたり 畝火山 木の葉さやぎぬ
風吹かむとす〕

又歌曰、

宇泥備夜麻 比流波久毛登葦 由布佐礼婆 加是布加牟
登曾 許能波佐夜牙流

〔畝火山 昼は雲とる 夕されば 風吹かむとそ 木の葉さやげる〕

於_レ是其御子聞知而驚、乃為_レ将_レ殺_二当芸志美美_一之時、神沼河耳命、白_二其兄神八井耳命_一、那泥、汝命、持_二兵入而_一、殺_二当芸志美々_一。故、持_二兵入以将_レ殺之時_一、手足和那那岐弓、不_レ得殺。故尔其弟神沼河耳命、乞_二取其兄所持之兵_一、入殺_二当芸志美々_一。故亦称_二其御名_一、謂_二建沼河耳命_一。

尔神八井耳命、讓_二弟建沼河耳命_一曰、吾者不_レ能_レ殺_二仇_一。汝命既得_二殺仇_一。故、吾雖_レ兄不_レ宜_レ為_レ上。是以汝命為_レ上治_二天下_一。僕者扶_二汝命_一、為_二忌人_一而仕奉也。故、其日子八井命者、……（分注略）……神八井耳命者、……（分注略）……神沼河耳命者、治_二天下_一也。

これと同内容の記事が綏靖即位前紀にも見える。記・紀両書を

松 本 弘 毅

比較すると、皇子タギシミが神武の崩後に弟たちを殺そうとするも、事前にそれを察知したカムヌナカハミミが彼を倒して神武の後を継ぐという共通した展開を持つことがわかる。その一方で、古事記にのみ伊須気余理比売の介入が見られることは目につきやすく、またそれ故に古事記特有の要素であるといえる。本稿ではその伊須気余理比売の歌二首について、改めて考えてみたい。

* *

タギシミという人物は、その名自体が「禍心を抱くもの」⁽²⁾などと解釈されるように、説話の成立当初から「反乱者」として存在していたと思われる。そしてカムヌナカハミミは震える兄を押しつけてこの邪悪な存在を打ち倒すことに成功し、その結果長幼の序を超えて第二代天皇が誕生する。当該説話は、基本的にカムヌナカハミミの登極を保証する性格を有しているといえる。

このような意味を持った説話を、記・紀はそれぞれの構想に合わせた形で載録したのである。書紀は天皇の資質として「孝」に重きを置き、綏靖即位前紀においてそれが前面に押し出されていると指摘されている。⁽³⁾つまり書紀では、神渟名川耳尊の個人的才能に特に焦点を当てた構成をとっているのである。

一方古事記においても、事件以前に聞き得た歌の解説により反乱を制するという展開でもって、神沼河耳命自身の力量は強調・称揚されているが、そうした展開は崇神記の建波迹安王の反乱説話に類似する。そこでは「山代之幣羅坂」の少女が歌を歌い、こ

れにより天皇は建波迹安王が反乱を企てていることを見抜く。少女の歌からは、何者かが天皇の命を狙っていることはわかって、その謀殺者の正体はうかがいしれない。しかし崇神はこうした歌を聞いただけで反乱の主体を見抜いたのであり、その卓越した能力が特記されているのである。神武記の伊須気余理比売は、三皇子に向けて歌を送った（以歌令^レ知其御子等^ニ）のであるが、その歌を正しく解いたのは一人（其御子聞知而驚^ニ）であった。この「其御子」は代名詞的ではあるが、歌を正確に読み解いたのは神沼河耳命のみであったことを表していると考ええる。伊須気余理比売は明確にその危機的狀況を知らせる意図を持っている点、崇神記の例と完全に同様とすることはできないが、それぞれの歌の本質を知り得た能力をもって、神沼河耳命・崇神共に称揚されていると考えられる。臆病な兄を押しつけてタギシミを退治するという展開は記・紀で一致し、古事記では特にその功績が「建沼河耳命」という称辞に込められているのであるが、それに加えて歌を解説する能力にまで言及されているのである。

このように表現に異なりを見せながらも、記・紀両書のタギシミの反乱説話において、カムヌナカハミミ自身の力量を特記するという意味で、基本骨子は共通しているといえる。神武記で特徴的なのは、さらに三輪祭祀権の相続という要素が加えられていることである。

カムヌナカハミミの母は、古事記では大物主神を父に持つ伊須気余理比売、書紀では事代主神を父に持つ姫蹈鞬五十鈴姫命とされている。書紀では二代以降の天皇にも事代主神の血筋は関わっ

てきており、問題となるところではあるが、今は古事記において初代天皇の太后が大物主神の血を引く者である点に注意しておきたい。

大物主神の扱いは記・紀で相違する。書紀はこの神を大国主神の「亦名」とし、古事記は独立した一神として定位している。そして神代記で御諸山の神が大国主神の国作りを手助けする条件としてその祭祀を要求してきていることや、崇神記での祭祀体制の確立が大物主神祭祀を中心に記されていることから、大和の国魂たる大物主神を特に重んじようとする古事記の姿勢が読み取れる。阿比良比売という妻がいながら、神武が太后たる女性として大物主神の女・伊須氣余理比売をさらに求めたのは、その婚姻によって大和の国魂を得る必要があつたためであらう⁽⁵⁾。

当芸志美々の謀略は伊須氣余理比売を「娶」つたことに始まる。この婚姻は、神武と伊須氣余理比売との婚姻の場合と同じように、当芸志美々が三輪祭祀権を獲得しようとしたことを意味していると見て誤りないだらう。神武と伊須氣余理比売との間に生まれた三皇子には三輪祭祀を相続する権利があつたが、当芸志美々にはそういった後ろ盾は一切ない。そこで伊須氣余理比売を手中に収め、異母弟たちを排することにより、三輪祭祀権の獲得を目論んだのである。

すなわち、伊須氣余理比売との成婚譚と当芸志美々反乱の説話とはしばしば別に扱われるが、両説話は一つのテーマで一貫していることがわかる。伊須氣余理比売との婚姻による三輪祭祀権の獲得とその代々の相続こそ、神武が「天皇」と表記されて以降の

主題である⁽⁷⁾。そしてこうした連続性は、反乱説話の冒頭で当芸志美々を「其庶兄」としていることに端的に表れている。「其」が指しているのは伊須氣余理比売との成婚譚の末尾で出生が記されている三皇子に他ならない。当芸志美々を伊須氣余理比売所生の皇子たちの「庶兄」と確認して、以降の展開を導いているのである。

崇神記での大物主神祭祀は、高志道・東方十二道・旦波国の平定や税の制定と共に崇神が成し遂げた大きな業績であり、そのハツクニシラスメラミコトという称辞と大きく関係する。崇神で一旦初期的な国家体制が整い、以後海に向こうにまで天皇の統治領域が拡大されていくことを記すが、その根幹たる大物主神を祭る権利を、初代神武の代に獲得させているのである。画期としての崇神の代を見据えた古事記の構成の一端といえるだらう。

こうした文脈の中で伊須氣余理比売が歌を送る。諸注諸論、当該歌を三皇子への危機の伝達として位置づける点は一致するが、その解釈は区々としており定解はない。カムヌナカハミミ顕彰が記・紀に共通するタギシミ反乱譚の基本的な性格であり、これがあまりに明白であることが、かえって伊須氣余理比売の歌二首の解釈を阻んでいるともいえる。当該歌は三輪祭祀権の象徴である伊須氣余理比売が歌つたもので、しかも書紀には見えない古事記独自の歌謡である以上、その構想上必要とされた可能性は認められるだらう。以下、述べてきたような古事記の文脈に配慮しながら当該二首の意味を考える。

* *

一首目では狹井河と畝火山が対置され、片方の畝火山で風が吹こうとしているさまが描かれている。ここから、純粹な叙景歌が当該段に転用されたとする見方もかつてはあったが、「畝傍山と狹井河とは藤原京の地帯を間にし、直線距離にして四キロ以上隔たつて居り、これだけの距離を捉へての叙景とすれば、もつと景觀として自然に浮ぶものがあるはず」であり、狹井河と畝火山が同時に詠みこまれていることの不自然さには注意を払う必要がある。狹井河と畝火山は、実景としての地理的な条件とは無関係に、何かの象徴として詠み込まれていると考えるべきである。

それではそれぞれの象徴するものは何か。まず畝火山であるが、これは当該二首にわたつて詠み込まれており、その主題に関わる句であるといえる。畝火山は、一首目では「雲立ちわたる狹井河の一方で「木の葉さや」ぐ状態になつており、二首目では「夕されば」(夕方になると)同じく「木の葉さや」ぐと歌われ、やがて吹く風の中心地として設定されている。

こうした畝火山の様子を当芸志美々の動向に照らし合わせて解釈する見解がある。例えば「当芸志美々命が畝火山に兵を集めて、狹井河辺に居る弟達を攻めようとされるのを諷唱した」とする説、畝火山は「当芸志美の居所であり、彼自身を象徴する」という見方、そして「タギシミミの陰謀が、昼も夜もそれと現はれてゐる。用心しなさい」(二首目の現代語訳)とする解釈などがこれに当たる。やがて起こる「風」の中心地であることから、畝

火山と反乱の主体たる当芸志美々を結びつけて考える説である。

しかし古事記の表現を追つていった場合、両歌に見える畝火山を当芸志美々と直接に結びつけて考えるのは難しいのではない。いくつかの注釈書で指摘されている通り、畝火山が象徴しているのは、古事記によれば「畝火之白禰原宮」で天下を治め、陵は「畝火山之北方白禰尾上」にあるという神武と捉えるのが妥当だろう。書紀を見ても神武の宮は「畝傍」にあり、またその葬られた地も「畝傍山東北陵」とされる。入麻呂の近江荒都歌にも、皇統の原点が「玉手次 畝火之山乃 檣原乃 日知之御世」(1・29)と歌われているように、神武は畝火山との縁が深く、神武の象徴として畝火山が詠み込まれていると考える。

次に畝火山と対置される狹井河を検討する。一つには延喜神名式の大和国城上郡に「狹井坐大神荒魂神社」(新訂増補国史大系による)が見えることを重視して、大物主神との関連を説く立場がある。例えば「狹井河がとくに歌ひこめられてゐる時、それは大物主神の荒魂の座す狹井の社を暗示することがあつたかも知れない」とする説などがこれであるが、後世の史料である延喜式に大きく寄りかかっている点に不安が残る。

それよりもむしろ、伊須気余理比売の家が狹井河の辺にあるという記述からすれば、一首目の狹井河は伊須気余理比売を指すとするのが妥当であろう。先に確認したように、伊須気余理比売を娶る当芸志美々の意図が大和の国魂たる大物主神の祭祀権の獲得にあるのだから、伊須気余理比売を介して大物主神も文脈に関わりを持つのは確かである。しかし諸注でいわれているように、こ

の場合には同じ神武記内のすぐ側に狹井河という特殊な固有名詞が表れることを重視して、歌に詠み込まれた狹井河は直接には伊須氣余理比売自身を示していると考ええる。上代の他文獻に見えない狹井河の名の由来として、分注で長文の説明がついていることの意味は、この一首目との関連において見出されよう。そしてこれにより、当該段は散文部と歌謡の句が密接に関わっていることがわかる。

次に、畝火山の状態であるコノハサヤギヌ（サヤゲル）について考える。助動詞ヌ・リが使われていることから、畝火山の周囲が既にコノハサヤグ状態になっている状況がうかがえる。この場合に注目したいのは、古事記中の次の二例である。

豐葦原之千秋長五百秋之水穗国者、伊多久佐夜芸^有那理。

(神代記)

葦原中国者、伊多玖佐夜芸帝阿理那理。

(神武記)

前者は天孫降臨前の、後者は熊野で神武が倒れたときの国土の様子であり、両者共に地上の無秩序・混沌とした状況を表している。当該二首では直接には木の葉のざわめく音を表すためにサヤグが使われているのだろうが、国土の混乱・混沌を意味する語が、初代天皇の崩後に再び用いられていることには、何らかの意味が認められるのではないか。すなわち畝火山のコノハサヤグ状態は、神武に象徴される正統な存在の危機的状況を示していると考ええる。そして畝火山に風が吹こうとしていることは、正統性を有する存在に致命的なことが起ころうとしている兆しと解釈す

る。散文部「将殺」との対応が認められよう。

こうした畝火山に対して、一首目における狹井河は「狹井河よ雲立ちわたり」という状態である。問題は、伊須氣余理比売の象徴と考えられる狹井河に立つ雲をどのように捉えるかにある。

宣長は雲を嵐の前兆と捉えたが、その雲が狹井河つまりは伊須氣余理比売に関わることの説明がつかない。近年では雲は単なる景色としてではなく、人の靈魂の表象として考えられている。⁽¹⁸⁾ 例えは斉明紀四年の、

伊磨紀那屢 乎武例我禹杯爾 俱謨娜尼母 旨屢俱之多々婆

那爾柯那皚柯武

という歌謡では、今城の小丘の上に亡くなった建王の靈魂たる雲のかかることが願われている。また景行記では、

波斯那夜斯 和岐幣能迦多用 久毛韋多知久母

と歌われているが、なつかしい故郷の家から立ってこちらへやってくる雲はその家人の表象であり、上代の靈魂観がその背景にある。また万葉集にも、

雲谷 灼發 意追 見乍居 及直相

(11・245)

春日在 三笠乃山尔 居雲乎 出見每 君乎之曾念

(12・330)

という歌が見える。こうした例から、生者・死者を問わず雲は人の靈魂とみなされていたことがわかる。

土橋寛は当該二首を明確に「物語歌」として位置づけて、一首目の雲を「悪靈の活動」を意味する「雨雲」と捉え、「当芸志美美命の謀叛の前兆としての意味を持つ」という。そしてそうした

「悪霊」としての雲が狹井河から立つ理由を当芸志美々の家が狹井河にあつたためかとするが、自説に自ら疑念を抱いている。¹⁹⁾古事記にはどの人物の位置も記されておらず、辛うじてわかるのは、「以て歌令知」とあることから、伊須気余理比売と神沼河耳命らが離れた場所にいることだけである。また、書紀の手研耳命は「片丘大誓中」にいたとされているが、古事記の当芸志美々はその居場所に関して言及がない。古事記は当該段における人物の位置を具体的に示すつもりはなく、従つてその場所の想定もできないと考える。

阿部誠も当該一首目のクモを「雨雲」ととり、「狹井河から波及せんとする危機」とは、伊須気余理比売の当芸志美美との婚姻を遠因としたもの」という。この説は登場人物の位置を推定する必要性から逃れ得ているが、当芸志美々と伊須気余理比売の婚姻は「歌謡の譬喩を物語上に活用すべく設定された」のだらうか。先に述べたように、当芸志美々が伊須気余理比売を娶つたのは古事記の構想に根ざす展開であり、その上で歌謡の譬喩があると考え

る。雲を畝火山の嵐の原因とするこうした解釈は、多くの先学が示してきた見解である。しかし、ではなぜその雲が狹井河から立ち昇るのかを考えたとき、この方向では文脈的な整合性をついには見出せないように思われる。また、雲を嵐の原因とした解では、「立ちわたり」のワタリを移動の意を強く持つた動詞として捉えていることがうかがわれるが、万葉集を見ると、

直相者 相不勝 石川尔 雲立渡礼 見乍将悵(2・122)

五)

波流能努尔 紀理多知和多利 布流由岐得 比得能美流麻堤
烏梅能波奈知流 (5・839)

足引之 山河之瀬之 響苗尔 弓月高 雲立渡

(7・1088)

などがあり、タチワタルは霧・雲についてしばしば用いられている語であることがわかる。阪倉篤義は霧という「静止的に見られるもの」に対して使われるタチワタルは、「徐々に拡がつていく、ゆるやかな動きが含まれてはいても、決して激しい移動を意味しはしない」語であり、当該歌のクモタチワタリも、「雲があたり一面に拡がり棚引していることを言う」と指摘している。²²⁾つまり、ワタリは移動の意に力点がある動詞ではなく補助動詞的に捉えるべきであり、「狹井河よ 雲立ちわたり」の句は、狹井河を起点として、雲が周囲一帯に立ち込めている様子を描写していると解するのが妥当ではないか。

また、狹井河という場所に雲が立ち昇ることの意味を考える際には、次の神代記の例が参考になる。須佐之男命は八咫遠呂智の退治後に宮を作る場所を探したが、須賀の地に宮を作ったときに雲が立ち昇つた(「自其地雲立騰」²⁴⁾)。雲の立ち昇りは「土地に生命力のみみなぎることを示す瑞祥」²⁵⁾、また「雲は大地の霊力の盛んな活動の姿であり、こも瑞兆」といわれるように、その地の霊威が盛んなさまを表している。神武記の当該歌では狹井河が雲の発生地であり、神代記を参考にした場合、狹井河に立つ雲は躍動するその地の霊力の表れと考えられよう。

タチワタルは狹井河に雲が立ち込めている様子を表しており、その地の靈の盛んな活動を意味している。そしてその狹井河は伊須氣余理比売の象徴として詠み込まれており、雲が人の靈魂の形象ともなり得ることを考え合わせれば、狹井河に広がる雲は伊須氣余理比売の靈魂の充足した状態の表れと捉えられるのではないか。

宮岡黨は神武記の当該一首目の雲を問題とし、「雲に寄せて歌う意識は、人の靈魂が雲の形象をとること、山や川に立つ雲が、その場所の「生のシンボル」として見られたこと、などの靈魂の觀念が普遍的に存在した中から形成されてきた」と論じ、二首目の雲について、「畝火山にかかる雲によって表明される内容は、皇祖、神武の生動あふれた靈魂の保証である」と述べている。一首目の狹井河の雲が何を意味するかは端的に述べられてはいないが、参考とすべき見解である。

後に述べるように、二首目では畝火山の昼と夕の状況が対比されているが、一首目は狹井河と畝火山の模様が対比されているのである。狹井河に雲が立ちわたることは、危機に瀕した畝火山（神武に象徴される正統な存在）とは違って狹井河（伊須氣余理比売に象徴される三輪の神）は安定した様子にあることを表している。そうした磐石な大物主神の力を当芸志美々は手に入れようとしたのである。一首目は、天下統治に必要な二つの大きな存在のうち、片方は万全であるのに対して、もう一方は致命的な危機に陥っていることを詠んだ歌であると考ええる。

二首目には、畝火山の昼と夕の様子が対置されている。その昼の状況はクモトキとされるが、これは問題の多い句である。「雲と居とは、雲にて居るを云なり、夕には風になるべき雲の、昼のほどは、未雲にて居るを云」、⁽²⁷⁾「昼は雲と与に静り潜み居而の意」、クモトキのトは「の如く」の意で、「⁽²⁸⁾昼は雲のやうに群つてゐると云ふ意」などと説かれてきたが、武田祐吉が万葉集の「奥見者 跡位浪立」(2・130)、「跡位浪之 塞道麻」(13・1333)との関係を説き、当該のトキを「動揺する意の動詞」とする説を打ち出してから、多くの注釈書が従っている。この武田説に対しては、阪倉が文法的に批判し、さらにキルを「本来、動くことを本質とするものが、しばしば停止していることを言う」動詞と指摘した上で、「畝火山昼は雲と居」というのは、畝火山が、昼間は、そこに懸かっている雲と一つになって、じつと静まり返っていることを言う⁽³¹⁾とする見方を示している。また阪倉は、波のうねりを表す語を雲にも使っているとするとヒルとユフで静と動の対比がしなくなると指摘しており、いくつかの注釈書にこの説は受け入れられている。

本稿の観点からすれば、「当芸志美の居所であり、彼自身を象徴する」畝火山を生き物に擬し、夕における本格的な活動を前に「しばらく息をひそめている状態が「居る」(傍点稿者)と解する阪倉説に賛成することはできない。トキを「動揺する意の動詞」と見る武田説は批判を受けたが、尾崎知光のように、「トキは万葉集に「跡位浪」とあるトキで、トラム、タワム、トエラフなどの語幹に通じ、重なり盛り上る意。雲が幾重にもかさなるさ

(33)「ま」のように解すれば、静と動の対比は崩れることなく、さらに一首目との呼応を見出すこともできるのではないか。昼の畝火山にクモがかかっていることは、畝火山に象徴される存在が十全な状態にあることを意味していると考ええる。

二首目には時間の推移が詠み込まれている。当該歌には「昼から夕への時間の経過があり、古代の叙景歌としては、大いに尋常さを破っている」という特異性は注目されてきたが、その意味は明確にされていない。宣長は「当芸志美々の、昼のほどは忍びて、さりげなくて在るを、雲の静まり居るに譬へ、夕になれば、汝等を殺し奉むとて、其事謀設けをするぞと云ことを、風の吹むとして、木葉のさやぐに譬たまへるなり」と説き、また飯倉は「静と動との対比が、『昼は』と『夕されば』という対比的な表現によって強調されている」と述べ、阿部は「ここは『雲とあ』『風吹かむとそ』共に嵐の前兆であり、そのいよいよ迫りつつあることを昼→夕への推移によって強調した」という。このように、多くの場合、ヒル・ユフは具体的な時間として捉えられている。

今まで見てきた通り、当該二首は、狹井河・畝火山・雲・風・サヤグとほとんどの句が何かの象徴乃至譬えであった。それならば、二首目のヒル・ユフもまた、単なる時間の推移を表しているのではなく、何かを象徴していると捉えるのが自然ではないか。「昼は」「夕されば」の対立的な表現からは、それぞれの状態もまた対立的であると想定できる。つまりユフは「風吹かむとそ木葉のさやげる」という風の捲き起こる寸前であり、それとは逆

にヒルは十全な状態なのである。これは畝火山＝神武に象徴される存在の靈魂の状態を表しているのであるから、ヒルには正統な存在が万全であったのが、ユフには抜き差しならぬ状況に追い込まれてしまっていることの表現と考えられる。では、そのように王者たる存在を危うくする時間の経過とは何か。

初代天皇として君臨し、天下を治めた神武であったが、その皇統は「天皇崩後」の当芸志美々の反乱によって窮地に立たされる。すなわち、ヒル・ユフが象徴する時間とは、神武の生前・死後であると考えられるのではないか。神武の兄・五瀬命は登美毘古との戦闘中に負傷して、「吾者為日神之御子、向日而戦不_レ良」といったが、そうした日神に連なる者としての認識があったため、ヒルは神武が生存していた時間の譬喩になり得たと考えられる。神代記において、日神たる天照大御神が天石屋に籠もってしまったときには「爾高天原皆暗、葦原中国悉闇。因此而常夜往」という状況に陥ったが、ユフは「アサ・ヒルとつづく明るい時間の最後」、また昼と夜の間の時間ともいわれるように、「夜」の一手手前の状態である。正統性の根源たる神武の「崩後」、直系の後継者は未即位で、しかも危機にさらされている。こうした状況をヒルが終わろうとしているユフとして歌い出したのである。二首目は天照大御神直系の皇統が、神武という大きな存在の死後、根絶の危機にあることを表していると考ええる。

一首目では対照的に狹井河と畝火山を描き、両者が象徴するものをクローズアップする効果を持つ。その象徴するものとは大物

主神と「天皇」たる存在であるが、その理由はこの二者が神武記後半の主題を担う存在であることに求められよう。そして強調される畝火山の異変は、神武に代表される正統な血筋の危機を表しているのである。二首目はその神武の死後として畝火山（王者たる存在）の状態異常を描き出し、王者たる神武の称揚と、その後継者が暴風に晒されようとしていることを歌う。確認したように、この二首には天下統治に必要な存在体（アマテラスの直系と大物主神）が詠み込まれているが、これらを神武（ウネビヤマ）と伊須氣余理比売（サキガハ）に象徴させることにより、両者の子である神沼河耳命らの正統性を表しているのである。

このような解釈を通じて、改めて神武記後半のテーマを確認できる。そこでは、当芸志美々の謀略譚までも含めて、大后・伊須氣余理比売との間に生まれた直系の皇子にこそ三輪山祭祀の相統権があると主張されているのである。

また、本稿の解によれば、当該二首が端的に警告を発している歌ではないことがわかる。確かに吹こうとしているカゼとは突き詰めれば当芸志美々の殺意を表しているが、歌謡中ではあくまでも近い将来の危機といった程度でしか表現されておらず、当芸志美々の叛意が前面に押し出されているわけではない。しかしそれにも関わらず神沼河耳命はただ一人庶兄の害意を知り、先手を打つことに成功した。このような神沼河耳命の超人性の描出が、当該譚の一つの眼目なのである。

本論で述べてきたように、従来から所伝との関わりの深さが指摘されてきた当該二首は、古事記の文脈に密着した意味を確かに持っている。当該段の文脈は散文部に主導されるものであり、伊須氣余理比売の歌二首は、神武記後半のテーマを浮き彫りにする効果をあげているといえるのではないか。かつての独立歌謡論の批判の上に、一字一音で記される歌謡と訓主体で記される散文部とは次元の異なるものとして古事記に載録されているとの指摘があるが、当該段の歌謡はその主題を鮮明にする役割を担っている⁽⁴⁾と考える。

本稿は伊須氣余理比売の歌二首を非常に観念的な歌謡ととらえるが、その歌謡史上の位置など考察が及ばなかった点が多い。今後の課題としたい。

注

(1) 古事記・日本書紀の引用は日本古典文学大系、万葉集の引用は塙書房『萬葉集』（補訂版）によったが、一部字を改めたところがある。また音注は省略し、その他の分注は「」に入れた。

(2) 西郷信綱『古事記注釈』第五卷（ちくま学芸文庫）一三六頁

(3) 大館真晴『「日本書紀」にみる綏靖天皇像——「孝性純深」という視点から——』（『日本書紀』の作品論的研究——人物造形のあり方を中心に——）

(4) 森昌文は知る力が王にとって重要であることを指摘している（「反逆者」、古代文学講座「人々のざわめき」）。また宮岡薫は「歌の表現を正確に理解した皇子たちの能力をも確認して、その聖なる資格を試した」（『古事記』『日本書紀』歌謡の歌体と節名）「古代歌謡の展開」四四頁と述べており、歌の理解と皇子の能力の関連については賛成したいが、現存諸本による限り、「皇子たち」とと

ることはできないように思う。

- (5) 松本直樹「トヨタマビメとスセリビメ——異界王の女——」〔古事記神話論〕

- (6) 松本直樹前掲注(5) 論

- (7) 宣長は当芸志美々が伊須氣余理比売を「娶」ったことに疑問を抱き、タハクと訓むべきと説いた〔古事記傳〕二十之卷、筑摩書房『本居宣長全集』第十卷、四三七頁。このように宣長が当芸志美々と伊須氣余理比売の婚姻を認めようとしなかったのは、神武の大后と当芸志美々との婚姻が權威の發損に繋がると考えたためと思われるが、これは宣長の杞憂であろう。なぜならこの婚姻は大物主神の存在の大きさを裏づけるものであり、ひいてはその血を引く代々の天皇の特権を表しているからである。

なお、本文で述べたように神武記の文脈を理解した場合、崇神朝の大物主神による疫病の流行が問題となる。今は、結果として崇神が大物主神を祭り得たことを重視して、神武記では祭祀の契機を得る点に力点があることのみ述べておく。

- (8) 相磯貞三「記紀歌謠全註解」八三—八六頁など

- (9) 日本古典全書『古事記』下、七一頁頭注三九

- (10) 中島悦次「古事記評釋」二四二頁

- (11) 阪倉篤義「ひるは雲とる」(鑑賞日本古典文学『古事記』二九二頁)

- (12) 倉野憲司「古事記全註釈」第五卷、一四五頁

- (13) 畝火山は直接には神武の象徴として詠み込まれているが、同時に天照大御神の直系である存在としての意味を強く持つ。代々の天皇は天照大御神の直系の子孫であり、その皇統に天下統治の正統性はあると主張すること、それが神武記の主題である。

- (14) 日本古典全書『古事記』下、三〇六頁補注一三。また山路平四郎は、伊須氣余理比売を中心として狹井河と畝火山をその父(大物主神)と夫(神武)の象徴と見ている〔記紀歌謠評釈〕五四—五七頁。

- (15) 最近では、山崎かおりがこの点に触れている(神武記謀反伝承における歌謠の一考察)〔国学院大学大学院文学研究科紀要〕三四、二〇〇三・三、九二頁

- (16) 西郷は、イタクサギテアリナリの「ざわめきは「未平」、つまり秩序なき混沌を意味する」という(ちくま学芸文庫『古事記注釈』第三卷、二二頁)。

- (17) 本居宣長前掲注(7) 書、四三九頁

- (18) 土橋寛は「ゆらゆらと揺れ動くものの中でも、とくに雲、霧、煙、陽炎などの事象は、生命力ないし靈魂の姿として見られることが多い。それらは一面では国土の生命力ないし靈魂の姿としても見られ、他面では人の生命力・靈魂の姿としても見られている」と述べている(「八雲立つ出雲」、日本文学研究資料叢書『古代歌謠』二—一二頁、傍点原文)。また同『古代歌謠と儀礼の研究』参看。

- (19) 土橋「古代歌謠全註釈 古事記編」九九—一〇二頁

- (20) 履中天皇が墨江中王の襲撃から逃げ出して石上神宮にいたとき、弟の水歯別命が謁見を申し込んでも天皇は承知しなかった。最終的に曾婆訶理の処罰が済むまで、全て「天皇令」詔(「令」奏「天皇」などと、人を介してやり取りがなされたことが示されている。当該の「以」歌令「知」からもまた、伊須氣余理比売と三皇子が離れた場所に行ったことがわかる。

- (21) 阿部誠「古事記・綏靖即位物語の方法——歌謠物語部の生成をめぐって——」〔国学院雑誌〕八八—七、一九八七・七、三七—三九頁

- (22) 阪倉前掲注(11) 論、二八六頁。なお阪倉自身は当該歌を、「いま畝火の檣原の宮にいる伊須氣余理比売が、狹井川の辺りに立ち渡っている雲を見やりながら、わが故郷の家を偲び、そこにいる皇子たちの上を想いやりつつ」歌ったものであり、立ちわたる雲を「狹井川の辺りの平和と繁栄」の象徴と解している(以上二八七頁、傍点稿者)。阪倉は詠じた者の位置をも確定する立場に立つが、登場人物の位置を推定できないことは前述の通りである。

(23) 「狹井河よ」の「よ」は、諸注で説かれているように動作の起点を表す助詞である。よってワタルを移動の動詞とする場合でも補助動詞的にとる場合でも、雲の発生する地点（狹井河）を表すことになる。

(24) 鑑賞日本古典文学「古事記」一一二頁注五

(25) 新編日本古典文学全集「古事記」七三頭注六

(26) 宮岡「神武記における歌謡の実相」(『古代歌謡の構造』一七四、一七六頁)。なお、新編日本古典文学全集「古事記」は「狹井河から雲が出てくるのは、そこが伊須気余理比売の本拠地だからであり、その地に住む神霊が異変を予告している」(二六一頁頭注六)と解釈しているが、雲が立つことと異変を予告することとの間には飛躍があるように思う。

(27) 本居宣長前掲注(7)書、四三九頁

(28) 橘守部「稷威言別」(富山房、七八頁)

(29) 次田潤「古事記新講」(改修版、三〇二頁)

(30) 武田祐吉「記紀歌謡集全講」七七頁

(31) 阪倉前掲注(11)論、二九〇、二九二頁、傍点原文

(32) 講談社学術文庫「古事記歌謡 全訳注」、西宮一民編「古事記」(おうふう、修訂版)など

(33) 尾崎知光「全注古事記」一二七頁頭注三七。なお、宮岡はト斗を武田説によった上で、当該二首目の雲を「神武の生動あふれた霊魂」と捉えている(前述)。

(34) 太田善麿「歴史文学の源流」(『論考「記紀」』一五〇頁)

(35) 本居宣長前掲注(7)書、四四〇頁

(36) 阪倉前掲注(11)論、二九二頁、傍点原文

(37) 阿部前掲注(21)論、三八頁

(38) 「時代別国語大辞典」上代編「ゆふ」(夕・暮)の項

(39) 近藤信義「古代の一日と「ぬばたまの夜」(前篇)」(『立正大学文学部研究紀要』四、一九八・三)

(40) 神野志隆光「文字テキストとしての『古事記』における歌」(『論集上代文学』二五、二〇二・一一)など参照

新刊紹介

西條 勉著

『古事記と王家の系譜学』

本書は「古事記の文字法」に続く、著者二冊目の古事記研究書である。前著が古事記の文字表現に焦点を当てているのに対

し、本書には神話・系譜関係の論文がまとめられている。

本書の中で、著者は、古事記の神話・説話は皇統譜に起源を与えるために作られたとする。神話は主に上巻に、皇統譜は中下巻に関わるが、そうした表面的な区分を超えて皇統譜の生成過程を掘り起こすことで、王家の物語をテキストの裏側から読み

解く。

神話と物語・説話を総合的に捉える基軸として系譜に注目した、大きな構想を持つ古事記論の集大成であり、研究者必読の書である。

(二〇〇五年十一月 笠間書院 A5判 四三八頁 税込九九七五円)〔原田雅子〕